

## ポンペの眼科とボードウィンの眼科

山之内 外一

平松学園大分視能訓練士専門学校

幕末、長崎に来て近代西洋医学の教育に携わった Pompe van Meedervoort (1829–1908) (以下ポンペと略) と A.F. Bauduin (1822–85) (以下ボードウィンと略) は共にオランダ・ウトレヒト陸軍軍医学校の卒業生で、来崎はポンペが先であるが、軍医学校ではボードウィンが教官、ポンペが学生の関係にあった。

略歴を見ると、ポンペの陸軍軍医学校在学期間は、1845～1849年で、卒後は海軍軍医として勤務し、1857年9月に長崎に来ている。卒後8年目で教育の経験はない。一方、ボードウィンの在学期間は1839～1843年で、その後1847～1862年まで母校の教官として勤務し、生理学、眼科学、外科学を教え1862年10月ポンペの後任として長崎に来ている。当時ウトレヒト陸軍軍医学校にはボードウィンより2年先輩の F.C. Donders (1818–89) (以下ドンデルスと略) が教官として在籍、衛生学、病理学、眼生理学を講じており、特に調節・屈折学の領域では知名の学者で、ボードウィンは彼と共著で生理学のテキストを著し、また、ドンデルスは眼科教科書として C.G.T. Ruete の *Lehrbuch der Ophthalmologie* 1845 を蘭訳し、学生の講義に使用している。ポンペは学生時代これらの教科書で学んでいる。

ボードウィンは1857年、ベルギー・ブリュッセルで行われた第1回国際眼科学会にドンデルスと共にオランダ代表として出席しており、眼科を専門とした医師であった。

1851年、H. von Helmholtz (1821–94) は検眼鏡を発明し、今まで未知であった眼底の観察が可能になり、眼科学に一大革命を齎し、眼科が外科学の分野から抜け出し専門学科として独立する起因となった。ドンデルスは1852年、器械工の Epkens と卓上型の検眼鏡を作り、弟子の van Trigt はこれを使って1853年論文に眼底像(網膜色素変性、網膜剥離)を発表している。ボードウィンは1859年 R. Liebreich の検眼鏡検査法を蘭訳しており、長崎でも講義し、診療にも使用している。しかし、ポンペがこれを知ったのは卒業してからである。関寛齋の朋氏眼科書には、眼病検索法の中に「近世探眼鏡ノ諸品ヲ用イテ克ク眼目ノ深所ヲ察シ得ルナリ。ヘルムホッス初テ探眼鏡ヲ作レリ」と記載され散瞳して行うよう述べているのみである。検眼鏡は関寛齋の「長崎在学日記」に、「文久2年元旦松本師より探眼鏡を賜う」の記事があり、型式は不明であるが既にポンペ在任中に日本に輸入されていたと考えられる。

眼科講義録については、ポンペには自身で書いた *Oogheelkunde* 1861 と関寛齋の「朋氏眼科書全」1863 があり(倉次元意識・眼科摘要はポンペの講義に他の文献をも取り入れて書いてあるので、ここでは触れない)、ボードウィンの口述書には「勃氏眼科新論」「鵬氏眼科」など多数があるが、ここでは前者を参考とする。

ポンペは眼科の講義をカリキュラム最後に行っており、彼の眼科は先に述べたように、検眼鏡発明以前の眼科で、前眼部疾患を主体に述べられている。参考としたのは、ポンペが学生時代使用したドンデルスの Ruete の眼科書を蘭訳したテキストであることは今年の洋史学会秋季大会で発表した。眼の解剖については別に解剖学講義(朋氏解剖論1857)でなされており、これには1859年刑死者の眼球剖検の記事が含まれている。眼生理学、眼光学については、口述されていると思われるが、現在のところその実態は不明である。

ボードウィンは開講の最初に眼科学を講じており、多数の口述書があるが、その内容は現在の眼科書と大差なく、眼解剖、生理特に眼光学、屈折調節、眼球運動、両眼視、眼科検査法、検眼鏡、眼疾患の検査、治療、手術と多岐に渡っている。特に眼底像の所見はポンペの講義には見られないもので、新しい眼科の到来を如実に示しているといえよう。